

高野秀行氏特別講演会

「外国語習得を探検する～究極の言語学習者が語る言葉の世界～」

言語系学会連合主催

2月23日（土）に、辺境ノンフィクション作家、高野秀行氏を招いて特別講演会を行なった。参加者は369名。

英語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、中国語、韓国語、タイ語、ビルマ語、インドネシア語、アラビア語、トルコ語、カンボジア語、ヒンディー語、オリヤー語、ブルシャスキー語、スワヒリ語、ソマリ語、リンガラ語、ボミタバ語、モシ語、ゾンカ語、カチン語、シャン語、ワ語。これらの言語を、高野氏は一体どのようにして身につけたのか。

まず、高野氏には、これらの言語を学ぶための強い動機があった。それは、「怪獣を探す」というような探検的動機である。高野氏は、早稲田大学の探検部時代、アフリカのコンゴにいるムベンベという怪獣を探しに行くために、フランス語を身につけた。しかし、現地人とのコミュニケーションのためにはリンガラ語も必要であることがわかり、リンガラ語も学ぶ。その後も、アヘンを栽培するためにミャンマーに潜入したり、西南シルクロードという、一般に知られているシルクロードとは別の、もう一つのシルクロードがどこに消えていくのかを探るために、中国の成都からインドのカルカッタまでを横断したりもした。そのような探検を行なうために、いくつもの外国語が必要になったのである。そして、多くの言語を学ぶうちに、言語を学ぶ動機が探検的なものから、「能格言語を学んでみたい」などという言語学的なものに向かっていったこともとても興味深かった。ちなみに、「能格言語を学びたい」という動機で高野氏が学んだ言語は、ブルシャスキー語である。

また、高野氏の外国語学習法も独特であった。学習したい言語のネイティブスピーカーを探し出し、個人教授を依頼する。しかし、たとえば、たまたま見つけたザイール人のリンガラ語話者が、リンガラ語を教えるプロであるわけではないし、リンガラ語を教えることに慣れているはずもない。そこで、様々な日本語の文を（必要に応じて媒介語を使用しつつ）リンガラ語に翻訳してもらい、リンガラ語の文法構造を自ら探って学ぶ。また、怪獣探しに必要な文もリンガラ語に翻訳してテープレコーダーに吹き込んでもらい、それらを真似して何度も発話し、その言語を身につけていったとのことである。高野氏は、このような学習法を「ブリコラージュ言語学習&使用」と呼んでいる。

様々な外国語を身につけていく話はもちろん興味深かったが、リンガラ語を話した時の現地人たちの反応や、アヘンを一緒に栽培した人たちとの独特な「乾杯」の方法に関する話などもとても面白かった。

挙手による質疑応答は行なわず、参加者のみなさんに質問を紙に書いていただいたのだが、質問の紙が 50 枚以上も集まり、とてもさばききることができなかった。言葉の話をしていただいたのだが、単純に「言葉の話」というカテゴリーには収まらない、とても有意義な講演であった。私自身、この講演会の企画にも携わったが、一参加者としても、心から楽しめたひとときであった。

文責：山内博之（実践女子大学）